# 以熱治熱　イヨルチヨル

椎名二瑚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

以熱治熱　イヨルチヨル

【Ｎコード】

Ｎ６５２８Ｄ

【作者名】

椎名二瑚

【あらすじ】

ソウルで働く日本人ユナと韓国人ヨンジュンの出会いは偶然？それとも必然？いつかは手放さなければいけないとわかっている２人の恋の行方は―。

## 1．光化門の雨（前書き）

このお話はすべてフィクションです。　実在する人物、建物、地域とは一切関係ありません。

## 1．光化門の雨

年末の忙しい最中にこっそり流れたニュースはごくごく一部の人たちに
大変なショックを与えたらしい。
遅いんだよ、と私はただつぶやいた。
‘それ’を1番最初に聞き、世界で1番不幸な女になったはずの私は今は平然としている。
そして何食わぬ顔で今夜の食材やお酒などをスーパーで選びながらシチリアの天然岩塩なんかに手を伸ばしている。
彼のために。
不思議だ。こんな時に思う。自分さえも信じられない、と。
そして思う。あなた達はいいじゃない。それなりに傷ついているかもしれないけど
私は目の前にいる本人の口から聞いたのだから。
ニュースってこんなに直接的なものだったっけ？
私たちは夜中のカフェには似つかわしくない2人だったと思う。
彼は言った。
「彼女に子供ができた。結婚する予定なんだ」
なんてことないどこにでもある話。チープすぎて笑いそうになったけど我慢した。
最初からわかっていたことだ。私はただ目の前のコーヒーカップを見ていた。
なんて綺麗な色なんだろう。琥珀色って言うんだっけ。
別に飲みたくなかったけど注文してよかった。
酔いが残っていたせいか目眩の中そう思った。
そして、それからどのくらいの時間、あの場所にいたのかも憶えていない。
確か、私はずっと黙っていた。

何も思い浮かばなかったのだ。いつもは溢れ出てくる彼への言葉が何もでない。
聞こえてくるのは隣のカップルの甘ったるい会話。
目の前の女の子たちが食べているパッピンスはピンク色でたくさんのフルーツで彩られている。
そんなふうに全然関係ないことばかり考えていた。
結局、私は一言も話さずにただ席を立った。
目線はコーヒーやパッピンスから前の席に座っていた男の安っぽい革靴に移る。
人間ってなんでこういう時は上を向けないものなんだろう。
彼の顔なんてもちろん憶えていない。多分見なかったんだと思う。
いや、見たくなかっただけだ。
一歩外に踏み出した瞬間、風が私に向かって吹いた。
ひとりで何でもできる私が突然小さい子供になってしまったようだった。すごく心細い。
どうしよう。こんな異国の地でひとりぼっちだ。
本当にひとりぼっちになってしまった。
私、これからどうしよう。

今日は雨。ただでさえ寒いのに窓の外は本当に冬色。
ここでは初雪は恋人と見るのが決まりだったっけ？ロマンチックな話だ。
そんなことを思いながら、仕事しなきゃと電話をかける。
先方に企画の内容を伝えるとなかなかの反応が返ってきて気持ちが弾んだ。
「安野(あんの)さん、最近手抜きツアーばかりですけど、これならすぐに完売じゃないですか？」
といつもお気楽な藤田くんは言った。
「うん、そうだね。やっぱりせっかく来て楽しんでもらうからには

このくらい中身を充実させたかったから、ちょっと他とは差別化をはかってみたの」
そうじゃなきゃ旅って面白くないし、ね。あとはお客さんがどう考えるか。
最近ここソウルでは日本人の観光客で賑わっていて、そのお陰で私たち旅行会社もご飯を食べていくのに困らない。
特に人気のあるエンターテイメント系は現地のコネのある企画会社と組んで様々なオプショナルツアーを提供している。
これがとても人気呼んでいてうちの看板商品になっているほどだ。

私は学生時代にオーストラリアに留学をし、おかしなことにその時が韓国との出会いの始まりだった。
大学の寮のルームメイトが韓国人のチェヨンで、同じアジア人同士と安心したのもつかの間カルチャーショックどころか先に韓国ショックを受けたのを憶えている。
似て非なり。初めて実感した。
女同士でも手をつないだり、私の物を勝手に使ったりあまりに距離のない関係に基本的にひとりが好きな私は一時期は寮を出ようと計画したくらいだ。
でも、それが親しい者との関係だと理解できるまで相当ケンカをしたけど今では仕事帰りの突然の呼び出しでも軽く1杯飲める貴重な存在となっている。（ホントは1杯じゃすまない）
そうして留学時代に身につけた韓国語と，韓国，という国に対しての好奇心が今は役に立っているというわけだ。

「安野さん、今夜合コンがあるんですよ！ハン銀行との！俺、今夜は勝負です！」
「ふ～ん。藤田くんみたいなキャラって韓国女性にうけるの？ソフトなイメージで売るとか？」
「男を前面に出しても軍隊出にはかなわないんで、女性を尊重する系でいきますよ。
安野さんも早くいい人見つけないとやばいんじゃないですか？」
「もういるから、いいの」
えっ？っともう一度聞きなおす藤田くんを置いて私は笑いながらオフィスを出た。
思いもしない答えだったから聞き取れなかったんだろう。
外に出ると雨はすっかりあがっていて顔全体を冷気が包みこむように覆ってくれる。
室内が暑いこの国では外に出た一瞬だけ気持ちいいのだ。
寒さは段々と体全体にまわり私は足早に地下鉄の駅へ急ぎながら
「いい人、か」と思わず独り言をつぶやいてしまった。
それならばヨンジュンしか思い浮かばない。
藤田くんの意味する「いい人」とはかけた離れてるかもしれない。
それでもいい。
あぁ、寒い。今、彼に抱きしめてもらえたら。
思い出したら急にそんな欲求が襲う。無理だと思うと余計欲しくなる。
あの手でいますぐ触れてほしい。
でも私は駄々をこねる自分の感情をすっかりコントロールできるようになっていた。
若い頃はこうはいかなかった。その結果は誰もがわかっているようにただ泥沼に発展するだけ。
「歳を取るっていいな」と今度は心の中でつぶやいたところで駅に着いた。

「ただいま」
ヨンジュンはいつもこう言って私の家に入ってくる。
実は私はそれをあまり好ましく思っていない。
でも次の瞬間、まるで手品のようにヨンジュンの腕の中にすっぽり包まっている私は
彼の嬉しそうな顔を見て、まぁいいかといつも思ってしまう。かなりの反則技だ。
それにただいまと言うわりに言葉とは逆にいつもちょっとだけ「おじゃまします」という態度もきちんと見せる。
そんな礼儀正しさを私は気に入っている。ちょっとだけ。絶妙な量だけ。
こんな時のヨンジュンの顔は普段の顔とはまったく違う。‘本当の女’くらいしか知らないかもしれない。
その彼女はきっと世界中で自分だけに向けられていると思っているだろうから
私は少し申し訳ない気持ちになる。
でも、これを手放すのはかなり惜しいのでただ「ミアネ」としか思わない。
ヨンジュンの頬が私の頬に触れると想像以上の冷たさに思わず声をあげてしまった。
そんな私をまっすぐ見るいたずらな目。
私はなんてそれに答えていいのかわからない。
「寒かったでしょう？ごはんより先にお風呂に入ったら？用意してあるから」
バスルームには彼のために用意した洗いたてのタオルや部屋着が完璧に用意してある。
まさか私がこんなことをする女だとは夢にも思わなかった。
チェヨンが聞いたらお腹を抱えて大声で笑うだろう。

最初私は彼がこれを当たり前だと思ったら嫌だと思った。
馴れ合いが過ぎる関係にはなりたくなかったからだ。
しかし彼は全然慣れない。いつでも感謝を忘れない。
そんなところが好きなのだ。
「うん、寒かった。ありがとう、ユナ」
そういっておでこにキスするヨンジュンの唇は頬より少し温かい。
私はこの瞬間いつもこっそり涙ぐむ。

ヨンジュンがお風呂に入っている間、私は急いで準備していた料理の続きに取り掛かる。
今日はショートパスタ。これから一緒にＤＶＤで映画を見るからいつも食べやすいものを選んでいるのだ。
エビとバジリコのショートパスタに松の実を加え
白ワインとグラスも用意して今夜もあまりお酒の強くない彼を少しだけ付き合わせる。
サラダやちょっとしたつまみをテーブルに並べて準備は完了。
韓国料理は作らない。きっとそれなりにおいしいものは作れるはずだけど
なんとなくかなわないと思って作らないようになってしまった。

「それだけ？変なの。」というのはチェヨン。
「ごはん食べたりお酒飲みながらＤＶＤ観て、語って、それで帰っちゃう時もあるの？
信じられない。長年連れ添った老夫婦じゃないんだから」と続ける。
「いいの。私たち、なんか双子みたいなの。話してるだけでいい時もあるし
一緒に寝たいと思う時も同じだし、通じ合っているというか」
「あの女よりも？」
「うーん、それはわからない。だけど彼女にない何かがあるから私と付き合ってるんじゃない？」

「役割分担ってこと？かなり都合いいね」
「私にとっても、ね」
「‘結婚’がゴールじゃない付き合いなんでしょ。ま、今を楽しんで。私はこれからデートだから」
と弾んだ声でチェヨンは電話を切った。
ゴール？結婚ってゴールなの？スタートなんじゃない？
ヨンジュンはそれを私とじゃなくて他の女とするのだ。何かを始めたのだ。共同作業を。
私たちは終わりに向かっているかもしれないのに。
でも、私にとっても正直都合はよかった。ここ韓国でいつまで仕事を続けるか先が見えない状態だった私は結婚を前提にした付き合いをする気にはなれなかったからだ。
特別好きな人もいなかった私に突然ギフトのように現れたヨンジュン。
恋をするってやっぱり楽しい。
私はこんな楽しいことをなぜしばらく放棄していたのか信じられないくらいだった。
さっきのチェヨンの言葉を思い出す。
長年連れ添った老夫婦だなんて冗談じゃない。まったく反対だ。
私たちの間にはいつもほんの少しの緊張感が存在している。
きっとすべてが終わった後は共同作業どころか何も残らないかもしれない。
かなりの時間を費やさなければ癒されないであろう傷以外は。

## 2．梨泰院のネオン

もともとひとりでも行動するのが好きな私はある日単館上映の映画を観に行った。
繁華街をちょっと入ったところにあるその寂れた建物はとても映画館とは呼べないような古い劇場だ。
シネコン化が進んでいる最近の流れとはまったく反対の存在。
道に迷い裏道を歩いている時に偶然見つけたこの情緒溢れる映画館を秘密基地のように思いわくわくした。
外のポスターを眺めていた私にアジョッシが「あと１５分で始まるよ」と声をかけてくれた。
黒縁メガネから覗くそのやさしそうな目の持ち主がここのオーナーだ。
オーナーといってもチケット売り、案内係、フィルムを回すのも俺だ、といつも笑う。
その時に上映していたのは「愛の讃歌　エディット・ピアフの生涯」。
もう３０年以上前の古い映画だ。
でもあの感動は永遠に色褪せることはない。

館内は相変わらずガラガラでひとり、ふたり、と数えられるくらい客はまばらだった。
誰も座っていないから真ん中の席に進むのも楽でいい、と思いながらにシートに座った。
私は上映中も音がしないようベーグルを非常食として持参し、来る途中でコーヒーを買い
持ち込んだ。
アジョッシにも同じものを差し入れるのが今ではすっかり習慣となっている。

うーん。今日はハズレかも。
映像はきれいだけど、ストーリーがなんだか退屈なフランス映画で
仕事の疲れも手伝ってか眠気に襲われた私は席を立つことも考えた
がせっかく来たし
やっぱり最後まで観ようと決めた。
なのに途中何でもないシーンだったにも関わらず私は笑いが止まら
なくなってしまった。
その時に俳優の表情が私にとってはツボだったらしい。
フランス語のニュアンスがおかしかったのだ。
迷惑になるから1度外に出てそのまま帰ろうと思った時、声をかけ
られた。
「これ、忘れ物ですよ」
ベーグルの袋を持った男が立っていた。
上映中なのにわざわざ追ってきてくれたことに対して申し訳ない気
がしたので一応謝った。
「途中なのにすみません」
「いいんですよ。僕もつまらないと思っていましたから」
と、そこで初めてきちんと目が合いお互い笑ってしまった。
「でも来週から始まるのは面白そうですよ？」と私は壁に貼ってあ
るスケジュール表を指さした。
「ドイツ映画ですか。確かに面白そうなテーマですね」
と彼は静かに微笑んだ。
「それでは、ありがとうございました。アンニョヒケセヨ」
と私は一礼して映画館を後にし、あんないい男がひとりで映画観て
るなんてもったいないなぁ、と思いながら
ちょっぴりうれしい気分でそのまま明洞に買い物に出かけた。

「このクレーム、かなり厳しいです。無理かもしれないです」
と泣きついてきた藤田くんをほおっておくわけにはいかず対応をし
たものの

かなり疲弊する作業だった。
ガイドの不手際でお客様を怒らせてしまったらしくツアー料金の返金を要求されたからだ。
日本人のお客様はマナーはわりといいのだけれど結構うるさかったりする。
韓国流に慣れると時々それを忘れていることがあり思わぬ失敗をしたりするのだ。
かなりじっくり話し合い、どうしたら納得してもらえるのか誠意を尽くす対応を心掛けたが
後味の悪さはもちろん消えない。
「こんなことで・・・」と思う自分に気づき反省した。
日本人が対応する会社だということで安心して利用してくれるお客様も多いのだ。
私たちのメリットを生かさないでどうする。
そう自分に言い聞かせ藤田くんにも伝えてみた。
「確かにそうかもしれません・・・。時々感覚が麻痺してることに気づいて
自分でもハッとしたりしますよ！安野さん、そんな時は教えてください！」
甘えるな、と一喝して一件落着。そんな私たちの様子を見ていた上司の三井さんは言った。
「明日の下見はよろしくね。撮影地の見学ツアーだからこのドラマの内容もチェックしてね」
「了解です。終わったら資料作成してメールで送ります」
「お疲れさま。今日は疲れただろうからもう帰っていいわよ」
私は得した気分になりやった！と手をあげたら
三井さんにこら、とやさしくこづかれた。

帰りはチェヨンでも呼び出して飲もうかと考えていたのに
私は急に映画を観たくなった。

前回面白そうだとチェックしていた映画はすでに終了していたのだがなんでもいいから行ってみようとタクシーで向かった。
あの映画館の雰囲気はやっぱり落ち着くのだ。こんな日にはぴったり。
タクシーから降りるとアジョッシが声をかけてきた。
「あれ、また来たの？好きだねぇ。デートする相手もいないのかい？」
「私が来ないとここ潰れちゃうでしょ？アジョッシのためですよ」
私は笑いながら言った。
人懐こい独特の笑顔を広げながら
「まだ予告だから早く行っといで」とやさしく促してくれた。
映画が終わりロビーに出ると後ろから
「この間の映画、面白かったですよ。来るかなと思って待ってたのに来なかったんですか？」
と聞こえ振り返ると
この前ベーグルの忘れ物を届けてくれた男がいた。
「あぁ、、ちょっと忙しくて。でも待ってたといっても毎日待ってたわけではないでしょう？」
少しドキドキしながらできるだけ軽く冗談っぽく答えた。
すると彼は言った。
「そこでコーヒーでも飲みながら今日の映画の話でもしませんか？」
気づくと私は彼と一緒に笑いながらカフェで3時間も話し込んでしまっていた。
その彼がヨンジュンだ。
最初に名前を聞いた時、私は「ヨン様」と彼をからかった。
彼は私の名前を韓国人みたいだね、と言った。
何ヶ月か前に除隊してきたばかりなのでたくさんの映画を観たくなり仕事の合間をぬって
あの映画館に通っているのだという。

私のことは前から知っていたそうだ。
女ひとりで来てるのを珍しいと思っていたのだと言う。
そして韓国人ではないこともすぐにわかったらしい。
「そう？そんなに違うかな？」
「そういう意味じゃなくて、、、まぁいいや。また後でわかるよ」
とだけ彼は言った。
彼の言葉通りこの意味はあとになって思わぬ方法で知ることになる。
しかもかなり引き返せない時点になってから。

ヨンジュンには長い間付き合っている彼女がいることを最初に聞いていたので
私たちはただの友達だった。
共通の趣味のある友達。なかなか悪くない関係だった。
彼はあまりお酒を飲まないと言っていたが私が飲みたい時は屋台に付き合ってくれた。
私が韓国の屋台を好きだからだ。
なんだか懐かしくて寒い時期でも柔らかい雰囲気。
冷気を遮る為のシートの向こう側は湯気で暖かいのがわかる。まるで家族団欒のように楽しそうなのだ。
韓国独特のスタイルは私を魅了する。
サムギョプサルのお店などでよく見られるコンパクトな赤い円卓も好きだ。
一緒に囲むとなんだかもっと仲良くなれるような気がするから。
「私ね、あのシーンが好きなの。教会で妹の子供の名付け親として誓うシーン。
‘はい、誓います’と言うマイケルの姿と一方では同じ時間に自分が指示した殺人が行なわれていて
善と悪のコントラストがすごく引立つの」
「うん、あのシーンは俺も好き。各シーンに渡ってバックに流れる

パイプオルガンがすごく合ってて
ドキドキするんだよね。神聖な場での音楽なのに殺人シーンでも使われてて」
とヨンジュンが話を続ける。
ビール派だった私は韓国に来てからすっかりチャミスルを飲むようになった。
日本の焼酎とは少し違って飲みやすいがストレートで飲むため酔うのは早い。
屋台にはこの緑色の瓶がよく似合う。
ちょっと飲んだだけで顔が赤くなるヨンジュンを見てかわいいと思ったのを憶えている。
熱く語り続ける彼を目の前にちょっぴり不埒なことを考えた私は自分を恥じた。
思わず下を向いてしまった私の顔を彼は不思議そうに覗き込む。
そんな目で見ないでほしい。
私はますます恥かしくなった。
「ちょっと飲みすぎたみたい。もうそろそろ帰ろうかな」
なんか落ちつかなくなった私はお店を出たくなったからだ。
その時彼は歯切れ悪くこんなことを言い出した。
「あぁ、、、あのさ、、、しばらく仕事で忙しくなって会えなくなるかもしれないんだ」
私、嫌われたのかな？
「そうなの。じゃあ、また時間ある時にでも連絡して」
となるべくさらっと返事をした。
落ち込んだ気持ちを隠す私に向かって
「ちょっと酔い覚ましに歩こうか？」と彼が言ったので
「うん！」
と自分でもびっくりするほどはしゃいだ声で返事をしてしまって焦った。
そんな私の様子をただの酔っ払いだな、というようにヨンジュンは

やさしく見てくれた。
しばらく2人でとぼとぼ歩いた。
それだけなのに楽しくて仕方なかった。熱くなった頬を冷ますのにぴったりだった。
私たちはたくさん笑った。そんなに面白い話をしていたわけじゃないのに。
坂を登っている途中に韓国風の風情ある家の庭から飛び出した梅の木を見つけた。
きれいに咲いている梅の花はその辺り一面にほのかに香り私はますます気持ちがよくなっていた。
だんだん春が近づいているんだなぁ。
酔っ払った私はただぼんやり思った。
その時だ。また坂を登ろうと足を踏み出した時、私はバランスを崩しすべってしまった。
結構急な坂だったから転んだらただじゃ済まないだろう。
転びそうになった瞬間、ヨンジュンが咄嗟に抱きかかえてくれて転ばずに済んだ。
私の心臓はドキドキしていた。あのヒヤっとした感じがまだ残っていたからだ。
もう気持ちは落ち着いたのにしばらく経ってもなぜか私は彼の腕の中だ。
私のほっぺたがちょうど心臓のあたりに位置し彼の鼓動がよく聞こえた。とても速い。
「ヨンジュナ？」
私は見上げて彼の顔を覗き込むと今まで見たことがない彼の目とぶつかった。
すべてを悟るのに十分な目。
彼の瞳は暗い夜でもほんの少し茶色い。
「もう大丈夫だよ」
私は今ならまだ引き返せるような気がして最後のカードを投げた。

「うん」
でも彼はまだ離さない。私はもう一度彼を見た。
もうだめだ。止まらない。私は覚悟を決めた。
彼が何も言わなくても私がわかったように
彼も私が言葉を発しなくてもわかったのだろう。
お互いの気持ちが急速に溶け出し重なり合ってしまった。
その夜から私たちの関係はただの友達ではなくなってしまったのだ。
きれいに散った梅の花びらの上で。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6528d/

---

以熱治熱　イヨルチヨル

2010年12月3日06時02分発行